

国 語

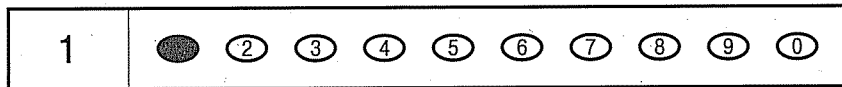
注 意

1. 問題は全部で16ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その1)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし、マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する記号・番号の○を塗りつぶしなさい。○で囲んだり×をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が1のとき)



4. 一度記入したマークを消す場合は、消しゴムでよく消すこと。×をつけても消したことになる。
5. 解答用紙をよごしたり折り曲げたりしないこと。

一次の文章を読んで後の間に答えなさい。なお、文中に引かれる田山花袋「第二軍従征日記」は、花袋が日露戦争に従軍して書いたものである。

ほくは、柳田國男と田山花袋は、同じ風景を見ながら、花袋はいわば「パノラマの中の自分」を発見し、それに驚く描写を無邪気にする一方、風景描写は漢籀的な定型化されたレトリックを費やすことに終始し、他方、柳田は一つの風景の背後にある歴史や習慣の蓄積を淡々と描き、「私」の感傷は短歌によつてさらりと表現されることを指摘した。二人の自然主義は既に根本において分かれていた、というのがほくの考えだ。

だとすれば、方法が異なる以上、花袋が柳田式自然主義を実践しようとしても、それは「パノラマ」的記述でしかあり得ないはずだ。事実、花袋は戦場にあつても何とも正直なことに戦争の光景を「パノラマ」と本当に比喻してしまふ。

自分等は愉快々々とただ見惚れていた。

殊に、愉快なのは敵の龍王廟の砲は、わが右翼のためにほとんど全滅の厄難に逢い、前進せる歩兵は続々復州河を涉り始めて、わが軍を二分したる山嶺の險、全くわれに帰したるばかりではなく、ちょうどその時分、敵の最右翼に廻つて、遂に敵の右側背を衝いた、安東少将の率ゆる第十九旅団の兵が、ようやくその適当な所に達したと見えて、龍潭山方面の山から山へと、烈しい小銃の音がさながら豆を煎るように聞こえ出した。

「愉快々々」

と佐野連隊長も覚ええず手を拍たれた。

想像して御覧なさい、実にその大景は一場のパノラマである。金州南山陥落前後の光景、それも中々みごとであつたが、それにも譲らぬのはこの時の光景であると思つた。ことにこの戦は敵にも味方にもこれという防備の無い純粹の野戦で、兵力も同じく、砲門も相若き、双方共にいづれ劣らぬ攻勢を取っているから面白い。（田山花袋「第二軍従征日記」）

この花袋の「パノラマ」としての戦争を見る

A

さは従軍記にほば、一貫している。それは花袋の視点が「観客」的だから

可能になる。例えば花袋はこう書く。

自分等の観戦地から前進したのは、午後三時。砲声は既に全く止んで、その時には、西双頂山にも既にいささかの敵兵の影をもとどめなかった。

(前掲書)

自身が今いる場所を「観戦地」と花袋が書くことに最大の注意を払おう。「戦」は当然、スポーツではなくほんとうの戦争であり、しかもそれを「観る」という視点が花袋の中に成立している。「観光」という明治期の大衆文化の中に出現したツーリズムと同じ文脈の中にこの「観戦」がある、と考えることが重要である。しかし、パノラマ館の展示が戊辰戦争やリアルタイムでの日露戦争であったことを考えると、¹花袋の視点は批難できない。戦争とは「観戦」されるものとして、大衆の前にこの時点で示されていたのである。日露戦争は国民皆兵制による戦場への国民の動員という点で、戦争への **B** 者性を国民一人一人に突きつけたはずである。しかし、花袋のこの視点はメディアを介して大衆に共有されていく。花袋とメディアは、「観戦地」から見た戦場という「観光」的視点を成立させ大衆に届けているのだ。

このような、花袋が「国民」でありながら戦場への **B** 者性よりも観光性によって戦争を把握していることは、だから花袋だけの問題ではない。花袋は「徴兵される私」ではなく「観戦する私」として戦場にある。²その二重性を花袋の筆は把握できないところが興味深い。しかし、それが近代の日本人のむしろ共通の態度だったようにも思うのだ。

むろん、花袋は戦場にいるのだから「パノラマ」的鳥瞰でなく、対象に近づいてそれを「見る」ことはできる。当然、戦場だからそこには「死」や「死体」がある。しかし、花袋の描写はそれも一つの風景としてしか描写できない。

自分等はその家屋を覗いて見る勇氣も無い。そのまま、顔も洗わず、飯も食わず、急いで門を出て、その旨を看護長に伝え、心侘びしく南山の戦場へと志した。天もこの悲惨なる光景を悲しむか、どんよりと薄鼠色に曇って、楊柳の葉はさながら泣いたように、昨夜の雨の名残を留めて居る。ああその朝の侘びしかりしことよ。自分は長く悲惨なるこの朝の光景を忘れぬであろう。金州の南門を右に見て十町も進むと、もう味方の死屍が路傍に転がったまま収容されずに残されているのが幾つと無く頭われ出して、そこにも一箇、かしこにも一箇と数えて行くと、³実に実にサイゲンが無い。

(前掲書)

4 死体は風景の美文的なレトリックの中に埋没し、花袋の描写はすぐに風景に対する彼の感傷に収斂する。感傷はあっても戦死者は風景でしかない。それはかつて伊良湖半島への旅で浜に寝る老人の姿を柳田とともに見た花袋が、未だ民俗学でなかった柳田がしかし家の外に寝るその土地の「習慣」から若衆宿にまで言及したのに対し、花袋はただ老人の境遇への感傷を語るだけで、およそ「習慣」や「歴史」に描写が及ばないことを思い出させる。

花袋の筆に描かれる死者が風景ではなく固有名を一瞬回復し、その具体的な姿に近づこうとするのは、坪内逍遙の甥、孤景の死の報を受けたくだけりだけである。つまり「有名人」の子弟にのみ固有名を持つのである。

せめてはその戦死の情況なりと聞こうと思つて、自分はそのまま路を第三大隊の宿営せるところへと取つた。(前掲書)

花袋は文壇の縁故者の死に接し、ようやく「戦死の情況」という具体像を知ろうとする。そして、花袋は戦死者の所属していた中隊に取材に行く。しかし、花袋のヒッチはこうである。

中隊長森大尉は、長身瘦軀、精悍の氣眉間に溢るという風の人であつたが、自分のために詳しく

月夜の大格闘

の状況を語ってくれた、「実に、その格闘の状は盛んであります。坪内君は南山の時にもずいぶん激戦をなさるし、今回も中々勇ましい御働きで、小隊を率いて最先にその山に突撃されたのです」

(前掲書)

自らは語らず、軍人に武勇伝としてその「死」を語らせる。引用中、「月夜の大格闘」の一句が行変えしてあるのはこれが見出しの役目を果たしているからだ。この一句からもわかるように、まるで講談のようなレトリックや「語り」の中に花袋は死者を回収してしまふのである。

このように花袋は戦場でどこまでいっても「風景」しか発見できない。あるのは遠景か近景かの差異だけであり、風景の中にある「自然」に感傷を発露することもあるが、彼は「戦場の中の身体」とでも言うべき具体性を最後まで発見できない。そして、固有名をもった「死」は講談的武勇伝に回収される。

しかし、これらは花袋の文学の問題と言うより、これが「戦争の書式」とでも言うべきものなのだ。だから、花袋の「観戦」者的

立場は作家としての特権というより、近代日本の戦争の書式の一つであったといった方がよい。戦後生まれのほくは戦争経験を当然持たないが、しかしイラク戦争においてニュース番組がバグダッドのジオラマを作り、嬉々として「戦局」を報じたその視線は記憶している。それは花袋の時代から一貫している「観戦」の態度だと思う。しかしパノラマ式自然主義では「国民皆兵制」の中で戦地にいる個人と、それを個人に求めた国家の所在を把握できない。

だから、「観戦者」花袋の身体は戦場から乖離かひりしている。そのことを象徴するかのように、「観戦」する花袋の「身体」は、敵の攻撃ではなく腸チフスに「感染」することでダメーヂを負うことになるのは皮肉な結末ではある。「戦場」は風景でしかなく、それは花袋に「感傷」以外に何も引き起こさない。そして彼の身体をさいなむのは敵の銃弾ではない。「戦場」は決して彼の身体に及ぶことはない。

(大塚英志「殺生と戦争の民俗学」より)

(注)

*パノラマ：円形の背景を描いた画面の前に、人形や草木などをおき、さらに照明の効果などによって、観賞者に野外の広い実景を見ているような感じを与える装置。明治時代に上野や浅草をはじめとする各地に「パノラマ館」ができ、戦場の風景が作られることも多かった。

問一 空欄 A に入る三文字以内の言葉を、文中から選んで書き抜け。解答用紙(その2)を使用。

問二 傍線部1「花袋の視点は批難できない」とあるが、なぜ批難できないのか。最適なもの(1)～(5)から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 1。

- ① 戦争を「観光」のように熱心に見つめる視点を持ったからこそ、日露戦争を同時代に正確に把握することができたから。
- ② 戦争をパノラマのように「観戦する」視点は、花袋だけのものではなく、当時の多くの大衆に共有されていたものだから。
- ③ 戦争が「観戦」されるものであることは、大衆に広く受け入れられ、道徳的にも許されることだと考えられていたから。
- ④ 戦争をスポーツのように「観る」視点を取り入れた文章には、明治期の大衆文化の表現として、重要な意義があるから。
- ⑤ 戦争を「観る」ような視点からではあるが、花袋の文章は国民皆兵制による戦場への動員という事実を国民に突きつけていたから。

問三 二つの空欄 B には、同じ言葉が入る。その言葉として最適なもの(1)～(5)から選び、記号をマークせよ。

解答欄番号は 2。

- ① 当事
- ② 当時
- ③ 同時
- ④ 往事
- ⑤ 往時

問四 傍線部2「その二重性を花袋の筆は把握できない」とは、どういう意味か。最適なもの(1)～(5)から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 3。

- ① 自分も日本の「国民」の一人であるという自覚が薄く、外国人のような第三者的視点から戦場を見ている。
- ② 自分は観戦記を書く文筆家なのだという意識が強いためにレトリックばかり考えている。
- ③ 自分が観光客の一人として戦場を見ているのだという意識を持っているわけではない。
- ④ 自分も、もとは徴兵された兵士の一人だったことを忘れて、文筆家になりきっている。
- ⑤ 自分も兵士の一人として戦場で死傷していた可能性があることを意識していない。

問五 傍線部3「サイゲン」を漢字に直した場合、最適なもの(1)～(5)から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 4。

- ① 細減
- ② 再現
- ③ 最元
- ④ 際限
- ⑤ 才源

問六 傍線部4「死体は風景の美文的なレトリックの中に埋没し」とは、どういう意味か。最適なものをお次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **5**。

- ① 自然の風景ばかりが描かれることにより、死体などなかったかのような文章になっている。
 - ② 客観的な描写にとどめるあまり、作者自身の悲痛な心情が伝わりにくくなってしまっている。
 - ③ 大げさな言葉が使われているために作者の感情ばかりが目立ち、死体を客観的に描くことができている。
 - ④ 戦場の悲惨さは風景として美しい言い回しで描かれるばかりで、死体そのものの具体的な印象は描かれない。
 - ⑤ 日本の伝統である無常の詠嘆の型にはまってしまい、目の前にある悲惨な光景を描こうとする意志が感じられない。
- 問七 傍線部5「ヒッチ」の「チ」と同じ文字を持つ言葉はどれか。最適なものをお次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **6**。

- ① 心理学
- ② 知識人
- ③ 致命的
- ④ 治療法
- ⑤ 価値観

問八 傍線部6「まるで講談のようなレトリックや「語り」の中に花袋は死者を回収してしまうのである」とは、どういう意味か。最適なものをお次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **7**。

- ① 坪内孤景の戦いについて力強さや勇ましさを強調するだけで、彼の欠点や戦死に至る原因について考証しようとはしない。
- ② 坪内孤景の戦いについて他人の証言によって語るばかりで、その死にざまを小説家らしい想像をまじえて描き出そうとはしない。
- ③ 坪内孤景の勇ましい戦いぶりを典型的に語るにとどまり、彼自身がどのように戦い死んでいったのか、考えてみようとはしない。
- ④ 坪内孤景の戦いと死を詳しく描いてはいるが、それに対する花袋の感情が力をこめて表現されているとはいえない。
- ⑤ 坪内孤景の死を語ろうとはしているものの、その身体が傷つき、死に至る過程を、順を追って描こうとしているわけではない。

問九 傍線部7「作家としての特権というより、近代日本の戦争の書式の一つであった」とはどういうことか。最適なものを次の

①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 8。

① 戦争の状況を伝えるにあたって、近代日本では決まった表現様式が確立しているため、花袋のような文学者といえども、そこから抜け出すことは難しいのである。

② 戦争を実際に「観戦」することは危険なので、近代日本ではそれを文章で伝える方法が発達し、花袋のような表現も含めて、定型的表現が成立した。

③ 戦場の風景を、観光地であるかのように美化し、情感をこめて描き出すような表現は、明治期の日本大衆文化特有のものであり、花袋の表現もそうしたものである。

④ 戦場も将来は観光地に変えられると考えるような観光業者的な視点は、近代日本の経済発展の中で生み出されたものであり、花袋もそれと無縁ではない。

⑤ 戦争を、自分とは縁のない風景や物語のようにながめることは、明治期から現代までの日本で、しばしば行われており、花袋もそうした視点で書いている。

問十 傍線部8「パノラマ式自然主義」では「国民皆兵制」の中で戦地にいる個人と、それを個人に求めた国家の所在を把握できな

い」とあるが、なぜそのようにいえるのか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 9。

① 「パノラマ式自然主義」は、対象を自分と無関係な「風景」として見るものなので、戦地で戦う一人一人の兵について、それぞれを思い、自分もその兵の立場になっていたかもしれないなどと考えるきっかけを持っていないから。

② 「パノラマ式自然主義」は、広大な「風景」を全体として見わたす視点からながめるものなので、戦地全体を広く見渡すことはできても、一人一人の兵というあまりにも小さい存在は眼に入っていないから。

③ 「パノラマ式自然主義」は、あらゆる「風景」を美しく描こうとする傾向があるので、平和な社会に生きていた個人を悲惨な戦争に追いやる国家などという、美的とはいえない存在を描くことには慣れていないから。

④ 「パノラマ式自然主義」は、基本的に「自然」に焦点を合わせて「風景」をとらえるものなので、「自然」に対して感傷を発露することはあっても、人間の姿や国家という存在を情感こめて描くような表現は成立しにくいから。

⑤ 「パノラマ式自然主義」は、「観光地」として「風景」を考えるものなので、美しい景色を成立させるために、じやまになる人間の姿を消去して「風景」を思い描く思考の習慣が、自然に身につけてしまっているから。

二 次の記事を読んで、後の問に答えなさい。

近代とは、ギリシヤ人であれば「コスモス」や「ピュシス」のような神的秩序、私のいい方だと「生命」「自然」「世界」「精神」といった「A」を排除し、無視し、さらには、それを可能な限り、人間が「作り出したもの」の統率のもとにおこうとする壮大な実験の時代なのであった。

それによって、できるだけ不確実性や「B」を排し、人間が自力ですべてを管理できるようにしようとした。何かが起こるかもしれないという不確かさへの嫌悪感、原因も結果もたどれないという無力感こそは、近代的理性に対する最大の脅威だったのである。このとき、ひとたび神秘的な力や聖なる秩序を排除すれば、その無知は人間自身が克服するほかないであろう。そのためには、人間が「作り出すもの」をできるだけ拡張し増強する必要がある。力を獲得することはまた可能性を拡張することだからである。人間は自分が作り出す秩序を管理することはできる。だからその秩序をできるだけ拡張することこそが、得体的にしろれない不確実性や偶発性、理不尽な脅威から人間を救いだすことになる。

かくて科学の無限の発展と経済成長こそが近代人の幸福の条件となった。ひたすら科学と技術を発展させ、人間の知力を経済発展につなげるという「脱工業社会」の夢が、近代の果てにわれわれが到達した高度な現実となった。そしていまやその延長上に、われわれは恐るべき実験に着手しようとしている。

「生命」についていえば、今日の生命科学や再生医療は、人間の生命現象の解明に着手しただけではなく、組織的な遺伝子操作や細胞の再生によって、人間の生命現象まで人為的に管理しようとしている。また、「自然」に関していえば、すでに素粒子物理学の展開によって、人間は科学理論を武器に自然の内部まで入り込み、自然における可能態であったエネルギーを人為的に作り出すことに成功した。また、今日、山や海や森林や気候という文字通りの「自然」は、環境テクノロジーと呼ばれる科学の管理下に置かれようとしている。自然環境も人間の理性的工学の対象へ置きかえられてゆくのだ。

「世界」は、部分的とはいえ、たとえばロボットや制御装置によって、ほとんど自動的に動き、作り変えられ、変形されてゆ

く。I O T^{*}も、世界を人間にとつての所与の環境とみるのではなく、情報系を通じて人間と世界(モノや生活環境や空間)を一続きにつなげてしまうというのだ。そして、最後に「精神」というと、いうまでもなく、今日、それは脳科学へと回収されつつある。¹精神現象は脳を扱う科学者のレシピに収まりつつある。その極限で、人間の脳は人工脳であるA Iと出会うことになる。そして、それらをつなぎあわせた第四次産業革命なるものには、巨額の研究費が投入され、経済成長の舞台へと送り込まれるのだ。

これはまさしく「近代」の夢が生み出した現実である。「人間が人為的に作り出したものを対象にする」という近代の、まだしも限界をわきまえた原則は、もはや歯止めがきかず、近代を突き破って暴走し始めた。近代の産物である「実証科学」や「実験科学」が、人間の生活をとりまく不確定で理不尽な環境、すなわち「与えられたもの」にまで手を突っ込んできた。それは、「生命」や「自然」や「世界」や「精神」まで、科学の原理に基づいて管理し、不確定性や偶然性を管理し、その全体をシステムとして統合しようとする。そして、ついには、「人間」そのもののさえ科学の対象となり、「人間さえも人為的に作り出す対象」とみなされつつあるというわけだ。

* ハイデガーはかつて「サイバネティクスは原子力時代の形而上学である」といったことを述べていたが、まさに、「生命」も「自然」も「世界」も「精神」もすべて「情報系」というひとつの視点から眺めて、それを自己組織的な制御システムに統合する、というサイバネティクスの思想は、人間が、与えられた自然という聖なる秩序のなかに分け入って、物理学という科学の恐るべき力によって、そこに自然とも人為ともつかないエネルギーを作り出したのである。人為的に「自然」を生み出した、ということもできるだろう。

そして、この形而上学の延長上に、今度は、人為的に「生命」を作り出し、人為的に「精神」を作り出そうとしている。この点でも最先端をゆくのはアメリカである。事実、2002年に策定された「人間のパフォーマンス改善のためのテクノロジー収斂」¹⁾、つまり、ナノテクノロジー、バイオテクノロジー、情報テクノロジー、認知科学、すなわち「NBIC」を領域統合的に収斂させて「人間のパフォーマンスを改善」するための巨大な計画に、アメリカ政府は多大の予算を投入しているのだ。

ここでは、人工知能、脳科学、生命工学、ロボット工学、遺伝子工学などが「収斂」し、科学と技術が一体となって、人間の「生の条件」を作り出そうとしている。「生命」も「自然」も「世界」も「精神」も、もはや「与えられたもの」としてわれわれの生の環境となっているのではなく、それ自身が「作り出されるもの」とみなされている。それが未来の経済成長の夢を紡ぎだしている。そしてこの夢の根本には、科学をめぐる決定的な変容が生じていることに注意しておかねばならない。それは次のようなことだ。

もともと、「科学」はギリシャの自然学から始まったといつてよい。それは、タレスの水から始まり、火・気・水・地の四根であれ、デモクリトスの原子論であれ、究極物質（万物のアルケー）を持ち出すことでこの世界を構成する根本原理を理解しようとするものであった。つまり隠されている「真理」を発見しようとした。しかしそのためには、「真理」が成立している場である「コスモス」の概念が前提になつていなければならなかったのである。

ところが、近代という時代は、「脱呪術化」と称して「コスモス」をホウチクした。そこに実証科学や実験科学が成立した。そこではもはや「コスモス」など想定する必要はない。ということとはもはや「真理」という概念を想定することは不可能になる。近代科学が定立するのは、ただただ人間の理性が生み出した「仮説」だけなのである。

この仮説の正しさは、名目的には事実³に合致するかどうかによつて検証される。しかし、事実といつても人間の認識であり、観測データであり、あるいは実験室で得られたり、また望遠鏡や顕微鏡など人間の作り出した技術に依存したものに過ぎない。まさしく、近代科学は、「人間が自分で作り出したもの」を対象とし、その世界へ自閉してゆく。

とすれば、科学の意味はどこにあるのか。もはや真理などというものを放棄した後に、科学の意味はどうなるのか。ほぼ考えられる唯一の答えは、それが「役に立つ」ということだけであろう。社会の役に立つ、人の役に立つ。このプラグマティズムに科学はよりどころを求めることになる。こうして科学は同時に技術⁵になった。両者の線引きは無意味になった。かくて、技術として社会の役に立ち、人の役に立つところのみ科学の意味がある。

とすれば、人間に対する制約となつていた「生命」や「自然」や「世界」や「精神」に対して働きかけ、それを「役に立つ」ように変形し操作すればよいではないか。こういう思考がでてきても不思議ではない。自然も世界も生命も「与えられたもの」つまり「コス

モス」ではなく、人間の役に立つべきものなのだ。こうして、NBIC収斂が出現する。それは実は「科学の自殺」にほかならないのである。それは「真理」への奉仕という誇り高い自尊心ではなく、「役に立つ」ものとして社会の奴隷になるからである。

問題は、では、この「役に立つ」とはどういうことか、という点である。まずは「役に立つ」とは、人間の幸福に資する、という答えが当然かえってくるであろう。しかし、そうはいつでも、何が人間の幸福かなどわからないではないか。それを論ずるはずの「哲学者」など、近代社会にはもはやいない。「科学」は「哲学」の後ろ C を失ったのである。いや、「実証科学」がそれを拒否したのである。「科学」と「哲学」は分離し訣別けつべつしてしまったのだ。だから、本当のところ、ある科学が「役に立つ」かどうかなど、わかりはしない。「役に立つ」というためには、その基準が確立されなければならないのだが、その基準(価値)を論ずるはずの哲学が見当たらないからである。

そこでどうするか。経済がでてくる。市場で利益を生み、経済成長に寄与すれば「役に立つ」ということにしたのである。これはこの上なくわかりやすい論理だ。なぜなら、市場で利益を生み出すということは、人々がそれを欲しているからであろう。有用性を市場の手に委ねたのである。経済成長すれば人々は幸福を増大できるはずだ、というわけである。かくて、近代科学は、生命や自然や世界や精神(の一部)を、自らが作り出そうというところまでできてしまった。そしてそのことが D と結びつけられたのである。さらにいえば、「哲学」を失ってしまった近代科学は、 D と結びつかなければ存在意義を失ってしまうのである。

(佐伯啓思『経済成長主義への訣別』による)

(注)

*コスモス…ギリシャ神話で、秩序整然とした調和ある世界。宇宙。秩序。

*ピュシス…自然。生命の源と考えられ、万物はそこから生まれ、そこへ没するとされた。

*IoT…「モノのインターネット(Internet of Things: IoT)」。身のまわりにあるあらゆるモノがインターネットにつながる仕組みのこと。

*ハイデガー…ドイツの哲学者。

*サイバネティクス…生物と機械の間に共通点を見出し、通信と制御の問題を追究する学問。

*ナノテクノロジー…極細な単位で加工・計測をおこなう超精密技術。

*バイオテクノロジー…生物のおこなう化学反応を、工業的に利用しようとする技術。

*タレス…古代ギリシャの哲学者。

*デモクリトス…古代ギリシャの哲学者。

*アルケール…ギリシャ哲学で、万物の始源、原理。

*プラグマティズム…実用主義。

問一 空欄 A に入る最適な語句を本文中から七字で抜き出せ。解答用紙(その2)を使用。

問二 空欄 B に入る語句として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 10。

- ① 論理性 ② 偶然性 ③ 抽象性 ④ 因果性 ⑤ 人為性

問三 傍線部「精神現象は脳を扱う科学者のレシピに収まりつつある」とあるが、その説明として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 11。

- ① 精神現象が科学の手によってA(人工知能)から切り離されつつあるということ。
② 精神現象が科学の手によって経済成長に寄与する「商品」とされつつあるということ。
③ 精神現象が科学の手によって「コスモス」の一部に還元されつつあるということ。
④ 精神現象が科学の手によって解き明かされるのはごく一部分に留まるということ。
⑤ 精神現象が科学の手によって「作り出されるもの」となりつつあるということ。

問四 傍線部2「科学をめぐる決定的な変容が生じている」とあるが、その内容の説明として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 12。

① 近代科学が、古代ギリシャの自然学の科学観を受け入れ、世界を構成する根本原理である「真理」の追究に重きを置くようになったということ。

② 近代科学が、仮説に合うような都合のよい観測データのみを分析の対象とするようになってきたということ。

③ 近代科学が、「コスモス」の存在を前提とせず、人間が自分で作り出したものを対象とし、人の役に立つところに価値を置くようになってきたということ。

④ 近代科学が、「与えられたもの」である聖なる自然の秩序に分け入ることを拒み、自然を人為的にコントロールするようになってきたということ。

⑤ 近代科学が、哲学をはじめとする人文科学の存在意義を否定することによって、「コスモス」を排除するようになってきたということ。

問五 傍線部3「脱呪術化」のここでの意味として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 13。

① 世界を構成する根本原理の構築

② 人間の「生の条件」の復権

③ 「真理」への飽くなき探求

④ 神秘的な力や聖なる秩序の排除

⑤ ギリシャ自然学の解体と再生

問六 傍線部4「ホウチク」を漢字にせよ。解答用紙(その2)を使用。

問七 傍線部5「技術」のここでの意味として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 14。

- ① データをすばやく処理する技法
- ② 物事を正確に観測する方法
- ③ 仮説を証明するための論理
- ④ 未来へと継承すべき伝統技能
- ⑤ 人や社会の役に立つ実用学

問八 傍線部6「科学の自殺」とあるが、その説明として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 15。

- ① 科学が高度に形而上学化し、社会への貢献や実用性を重んじるプラグマティズムの姿勢を失ったということ。
- ② 科学が「生命」「自然」「世界」「精神」を排除し、「人間が作り出したもの」にのみ価値を置くようになったということ。
- ③ 科学が「真理」への奉仕ではなく、人や社会の「役に立つ」ことに自身の存在意義を見出すようになったということ。
- ④ 科学が哲学から距離を置くようになったことから、科学と哲学の蜜月時代が終焉を迎えるに至ったということ。
- ⑤ 科学が得体のしれない不確実性や理不尽な脅威に屈し、「真理」への奉仕という誇り高い自尊心を失ってきたということ。

問九 空欄 C に最適な一語を漢字で入れよ。解答用紙(その2)を使用。

問十 傍線部7「有用性を市場の手に委ねた」とあるが、その説明として最適なもの、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **16**。

- ① 経済成長に寄与するもののみを市場に流通させたということ。
- ② ものの希少価値を高めることで人々の購買意欲をかき立てたということ。
- ③ 人を幸福にするものだけが社会において存在価値を持つものとみなしたということ。
- ④ 物流コストを削減することにより、市場に流通させるものの値段を下げたということ。
- ⑤ 市場で利益を生むものを「役に立つ」ものとみなしたということ。

問十一 二つの空欄 **D** に入る語句として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は

17。

- ① 経済成長
- ② 哲学
- ③ 真理
- ④ 脳科学
- ⑤ 近代的理性



